

投手の障害予防に関する有識者会議 議事要旨

(第1回)

平成31年4月26日(金)

公益財団法人 日本高等学校野球連盟

第1回 投手の障害予防に関する有識者会議

平成31年4月26日（金）

午後2時～同3時57分

明治記念館「芙蓉の間」

（次 第）

1. 開会挨拶
2. 委員紹介
3. 座長選任
4. 配付資料の確認
5. 有識者会議設置の背景
6. 新潟県高等学校野球連盟から
7. 障害予防の方向性について
8. 今後の進め方
9. 次回の予定
10. 閉会挨拶

・ 出席者（12名）

宇津木 妙 子	岡 村 英 祐	川 村 卓	小宮山 悟
田名部 和 裕	土 屋 好 史	富 樫 信 浩	中 島 隆 信
正 富 隆	百 崎 敏 克	山 崎 正 明	渡 邊 幹 彦

・ 欠席者（1名）

渡 辺 元 智

・ 事務局（4名）

竹 中 雅 彦	小 倉 好 正	井 本 亘	古 谷 純 一
---------	---------	-------	---------

（以上 敬称略）

1. 開会挨拶

- 八田英二日本高等学校野球連盟会長挨拶

2. 座長選任

- 委員の互選により、中島隆信氏（慶応義塾大学商学部教授）を選任。
- 中島座長挨拶

3. 配付資料の確認

- 事務局から以下の配布資料について確認。
 - 資料1、日本学生野球憲章（抜粋）。
 - 資料2、高校野球特別規則（抜粋）。
 - 資料3、選抜高等学校野球大会、全国高等学校野球選手権大会 大会要項（抜粋）。
 - 資料4、①高校野球における投手の障害予防に関する取り組み。
 - ②健康管理とその対策（日本高等学校野球連盟70年史から抜粋）。
 - 資料5、①高校野球部員数調査資料。②高校男子生徒と野球部・サッカー部員数推移。
 - 資料6、中学男子生徒と野球部・サッカー部員数推移。
 - 資料7、部員不足による連合チーム数変遷。
 - 資料8、野球団体関係図。
 - 資料9、実態調査（第100回全国高等学校野球選手権記念大会から抜粋）。
 - 資料10、スポーツ庁・運動部活動に関する総合的なガイドライン（抜粋）。
 - 資料11、日本臨床スポーツ医学会の提言（1995年）。
 - 資料12、選抜、選手権両全国大会での過去20年間の複数投手の起用実態。
 - 資料13、小学生・中学生野球選手1万人の実態調査（運動器の健康・日本協会）。
- 新潟県高等学校野球連盟からの資料、選手の将来第一「義」Player's Future First。

4. 有識者会議設置の背景

- 事務局から有識者会議発足の背景として、日本高等学校野球連盟のこれまで行ってきた障害予防への取り組みと高校野球の置かれている現状を説明した。

5. 新潟県高等学校野球連盟からの説明

これまでの新潟県高等学校野球連盟の取り組み、投球数制限に至る経緯について説明。

6. 投球数制限に関して意見交換

- 正しい身体の使い方、投げ方を選手に教えていくことが大切。ただ、教えて全員ができるものではない。無理をすれば壊れる。大会で一律に線を引くものではない。また、高校野球だけで取り組む課題ではなく、何よりも小学、中学生と一緒に取り組んでいく課題。
- スポーツ界が変わってきている。指導者は環境が変化していることを理解し、昔のままの指導ではいけないので勉強しなければいけない。それと投球数制限に関して言えば、個人によってあまりにも差がある。変化球を多く投げる投手と剛速球を投げる投手、また公式戦と練習試合でも違う。やはり医科学の先生方と話をしながら、選手たちの将来を考えてあげるべきではないか。

【論点整理】

投手の障害予防を考えるうえでは、非常に広範囲にわたって課題と施策を検討していく必要があり、本有識者会議で今後の議論を円滑に進行するためにテーマを以下の3つに絞った。

- ① 投球数制限について、どのようなルール作りをするべきか。
 - ② 高校生ならびに成長期にある小学生、中学生たちへどのような指導方法、障害予防を推進していくか。障害予防の方向性について。
 - ③ 競技団体が行うべきルールとチームが主体的に行う取り組みについて
- ① **【投球数制限について、どのようなルール作りをするべきかについて】**
- 投球数制限についてはいろいろな意見が現場から聞こえてくる。地方は二極化している。現状で1試合100球制限をすると部員数の少ない学校ではとても厳しい。ただ連投を避けることは重要だと思う。野球の特性として格下が格上を倒せる競技で、その原点は投手。1試合100球という制限は選手たちが本当の喜びを分かち合うことができにくくなり、かえって野球離れが生じる懸念がある。
 - 先の全国大会で優勝したとき複数投手で戦った。甲子園では一人では勝てないから二人でやった。一人であれば一人でやる。ここに出てくるまでにいろいろ周囲から意見を聞いて

た。高校生なので自分の管理は自分です。任せて欲しいと言っている。僕も反対だ。

トーナメントで負けたらおしまい、子供たちの気持ちも考えてほしい。

- 高校生と小中学生とでは制限をする意味が違う。1試合当たりの球数制限はインパクトが大きいが、障害予防から考えると短期間にたくさん投げるのは障害に繋がる。1試合ではなくもう少し広い範囲で考える必要がある。
- 新潟の提言では小中学生を含めた野球界全体へのメッセージと思う。その中でインパクトの大きい高校野球がどちらを向くか問われている。野球界全体で取り組むいいチャンスだと思う。投げなければ故障しないわけではない。正しい投げ方を誰が教えるのか、理論を含めた実践が大切。小さいときからいい指導者の下でやれば故障はない。
- 今回委員として参加されている指導者の方のもとではケガはしない。これまでの資料では小中高での怪我が95%。投球数制限だけが予防の効果が確かめることができるのかというと、壊れるまで投げさせるような実験はできない。オーバーユースによるけがもあれば、極端に言えば、一発でけがをするケースもある。投球間隔や一定の制限も故障を防ぐことになるので制限は賛成だ。しかしそれだけではいけない。野球界全体で考えることが大切。少ない野球人口をいかに育てるかを考えないとこのままでは野球界が危ない。
- 中学校では約8000校が加盟している。部員数の平均は20.6人、以前は30人ぐらいであった。そのころは、試合は上級生だけで臨んでいたが、現状はまだ力のない下級生も加えてゲームに臨んでいる。中学生の1年生と3年生では体力差がかなりある。子供の負担は大きい。今年も部員数は減少していると思う。投球数制限はチームにとっては厳しいが、今7イニングでやっている。2試合投げるときは9イニングまでとしている。全国大会は会期が限られている。25チームが参加して4日間でやっている。ダブルヘッターが避けられない。今後、参加校を減らすか、大会日程を増やすか考えなければならない。

② 【高校生ならびに成長期にある小学生、中学生たちへどのような指導方法、障害予防を推進していくか障害予防の方向性について】

- 1993年から日本高野連が検診を始めているが科学的なデータで決めるのは難しい。高校生に関する制限は甲子園の検診時のアンケートから考慮した。投手は1日当たり120球以下だと70~80%で故障はなく、1週間の投球数が500球以下だと80~90%で故障はなかった。200球以下もいた。500球以上は1割程度。

- 1週間で500球が高校生にとっていいのか、高校野球がゴールか、その先に野球を続ける場合、ベースは高校時代にある。
- ガイドラインを超えて不当な練習をさせた場合、法的な問題が生じるか。
- ガイドラインは自主的な措置。これまでにはなかったが、仮に保護者からの訴えがあった場合、ガイドラインはルールとしてか、提言か、団体として遵守するのかで違う。指導者が安全配慮義務を果たしていないことになるかも知れない。
- 先ほどの日本スポーツ臨床医学会が出した具体的な数字はなにを根拠にするのか。野手が打撃投手をやる場合、20分ほどで100球を投げる。すると野手もできないことになってしまう。明確な根拠があるのか難しい。
- 100球で制限するというのはあくまでケガをしないためということだろう。それでは試合が成り立たないということにもなるのでどこかで妥協点を探る必要がある。

③ 【競技団体が行うべきルールとチームが主体的に行う取り組みについて】

- 競技団体の責務がどこまでか、学生野球憲章で定めている理念がある。またスポーツ基本法での定めもある。国や地方公共団体の責務はどうか、一方チームの主体性はどうか。後遺症が残るケガとは異なる内容で、日常生活に直接関係しない事例もある。
- 新潟の意見は素晴らしいと思う。しかし、教え子で卒業後も野球を続けたのはわずかしかない。ほとんどが高校で野球生活を終わる。夏の大会は最大の目標だ。生徒たちにとって将来ではなく今が大切だ。
- プロを頂点とした将来ではなく、生涯を通じてという意味だ。さきほどの委員の今というのも理解できるが、親になってもいい指導ができるようになってほしい。
- 新潟県の提案は高校だけでなく小学校、中学校を含めた野球界全体でのスポーツ障害予防の取り組みを訴えていると思う。その点では誰も反対はない。ただ高校野球は長い歴史の中で多くの国民にも支持を得てきて発展してきた。そのことを考えると取り組みを変えるのも簡単ではない。高校野球の障害予防の取り組みでも初めてから20年余りたつが、10年くらいかけて周囲の理解を得ながら延長回数を短縮したりタイブレークの導入を図ってきた。先にスポーツ庁では部活動のガイドラインとして取り決めをしているが、今回の新潟からの提案に対し、競技団体としてどこまで制限できるのか、またチームの主体性で考えることができるのではという点を考えてみたい。

障害予防という観点からすぐにでもやるべきこと、そして5年ぐらい先に目標を置いてガイドラインとして設定し修正を図っていくことなどがあると思う。この有識者会議で皆さんの意見を集約できればと思う。

座長 ここまで皆さんから貴重なご意見をいただいた。次回はドクターから医学的な見地からのご意見、また子供たちの現在の環境からの障害予防に関する視点を伺いたい。高校野球はトーナメント方式でやってきたが、全国大会だけでなく地方大会の日程がどうなっているか、また全国大会での投球実績を30年ぐらい遡って調べたデータを事務局から提示してもらいたい。同時に地方大会でも少なくとも5年ぐらいの実態を調べて欲しい。

以上